

## デザイン部岡部正数の錯乱

(ここは本当にいいところだ。気持ちのいい空気と緑に囲まれ、意識もくつきりとして、いろんな事が思考できそうだ。

お、なんだ。リスだ。可愛いな。こっちへおいで。こっちを見てるよ。背中 of 縞模様はつきりしてるな。シマリスだな。日本の固有種じゃないが、こんなに近くで見たとないもんな。瞳が奇麗だよな。あ、行ってしまった。そういえば、さっきから気になった音は水の音だよな。十メートルばかり先、左から右へ水が流れてる。チロチロと音が聞こえて右の先でちょっと段差があるのかな、サーっと音が変わってきてる。この目の前の草は何て名前なんだろう。細い葉だけが風にゆれて綺麗だよな。手前から向こうにサーーとなびいて。風にもリズムがあるんだな。風だけじゃ分かんないが、草が形や音や色を作ってるよ。

こんな気分、随分久しぶりだよな。今日の目覚めも清々しくて。そうだよな四十年ぶりにくらいかな。子どもの頃の夏休みの朝、なんだか起きたとたんに自然との一体感があつて、生きてることが感じられて)

「正久。ご飯早く済ませて好美起こしてやってよ。お母さん洗濯物干さなきゃならないんだから」

「好美、今日学校ないんだろ。起きやしないよ、土曜日だろ」

「正久も、そろそろ家に生活費入れなさいよ。好美の学費もかさむし、こここのところ野菜も値段上がってるし」

「まだ待ってよ。こないだ買い換えたパソコンも半分は俺も出してるんだから」

「節約してるの？ 好美も最近はお弁当作ってるのよ」

「営業の仕事じゃ、いつ食べられるか分からなくて無理だよ。この暑さじゃ腐っちゃうよ。好美みたいに昼休みちゃんとあるわけじゃないんだから。お父さん、昨日も泊まりなの？」

「そうみたいね。近ごろじゃ、電話もよこさないで泊まるんだから。あら、電話よ。正久、出てよ」

「もう出かけなきゃ、間に合わないよ。お母さん、スーパーまだだろ、出てよ」

「だから洗濯が。正久。はいはい、出ますよはいはい。もしもし、岡部でございます。あ、

村上さん。いつも主人がお世話になっていきます。以前は息子の就職祝い、ありがとうございました。はい、おかげさまで。はい、ええ、どうも。……。えっ……！」

（ここへ来て、どのくらい経つんだろう。本当に清々しく、空気の動きの中に自分が溶け込んだような、充実した存在感がある。左側は雑木林で右側は竹林から上の方は杉林で、その上に青空が出ている。左の雑木林の先には、ずっと先の山の尾根が左から右へとなだらかに続き、杉林のところで見えなくなってる。左の尾根の途中、やや高くなった山の頂きに一本だけ、でかい、あれは杉の木なのかな？ あの木だけがやけにはつきりと見えるな）

大野印刷は、広告、出版の二つのデザイン制作部を持つ。岡部正数は部下三人の出版デザイン部の部長である。部下三人で部長でもないが、かつては十人を超えた時代もあったのだ。印刷所にとって出版物の印刷は手間ばかりかかり利益のあがらない分野となっている。かつては印刷の中心は出版物であったが、商業印刷物の注文は、経済の発展に伴い爆発的に増えてきた。綴じ、製本と手間のかかる出版物の印刷と違い、「商印」と略して呼ばれる広告関連の商業印刷は、ほとんどが印刷化粧裁ちのみで納品可能なチラシで、その多くはカラー印刷でもあり、利益率も高い。

多くの中小の印刷所は内部での制作や組版をしなくなった。お客さんから完成したデータをもらうだけで、余計な人材を置こうとしない。それに比べれば、大野印刷は都内に制作と営業部、埼玉の工場には製版・印刷と共にDTP組版部十名を抱えているだけ、まだまだしなのかもしれない。

「岡部君。ちょっと」

五年前、社長の遠い親戚だという前野が専務という役職についた。前職は銀行マンだそうである。印刷部との打合せの後、その専務に声をかけられた。

「さつき、進啓出版から連絡があり、カバーの色校、上がりの時間を聞いてきたよ。上がっていたのでバイク便出しといた」

「ありがとうございます。バイク便は、もう来たんでしょうか」

「ああ、もう二十分前にも。岡部君も村上君もミーティングに入っていたのでね」

「色の調子どうでした。写真の右上の赤、弱くなってましたか」

「そんなこと、よく分からんよ。進啓出版急いでるようだったのね」

「うちの製版、最近よくないのご存じですよ。やはり、営業部長を通してもらわないと」  
「岡部君。その態度は何なんだね。ただでも出版は利益が出てない部だよ。営業も困ってるんじゃないのかな」

「……すみません。しかし、専務もいいかげん……」

「いいかげん、何だと言うんだね」

「すみませんでした」

これ以上、何を言っても仕方がなかった。自社の商品についての自覚や、こここの製版担当の社員の退職で、新人に出力を任せなくてはならない状況など、会議では出るのだが、専務にとっては菌車を換えればすむとしか思えないのだろう。

デザイナーに戻り、担当の由川に声をかけた。

「由川。進啓出版のカバー、色校上がったようだな」

「ええ。でも、さつき専務がバイク便出すからと持って行かれましたが」

「ああ。聞いている。由川は見たのか？」

「いえ。上がったばかりでしたので」

「そうか……」

「進啓出版の相川さん、指示、的確な方ですよ。印刷にも詳しいし、できるできないを理解している方なので、こちらも、仕事やりやすいですよ。他の所はひどいですね。原稿整理までデザイナーにさせようというところもありますし」

「その分、相川さんなんかには、こちらの手抜きもバレてしまう。うちの製版、吉見君が辞めて、ひどいな。毎回、工場に行くわけにもいかんし」

「部長。電話です。進啓出版の相川さんです」

数日後、営業部長の村上と、食事をする。以前は頻繁に呑んでいたが、こここのところ二人ともバタバタで時間が取れないでいた。村上は入社以来の先輩で、亡くなった元さんには、共にさまざまなことを教わり、印刷とは何かを叩き込まれた仲間でもある。村上からも印刷営業という立場から、紙のこと出版業界のことなど、直接にも多くのことを教えられた。

「先日の進啓出版のカバーの件、その後どうなりました？」

「岡部があの日、直接行ってくれたのがよかった。取引も継続できそうだよ。うちも、製

版の吉見が辞めてからひどい色校出すようになってしまった。進啓の相川さん、怒る気持ちも分かるよ。本当は、ああいう人を怒らせちゃいかんのだがな」

「ほんとうに申し訳ありませんでした。部内でも徹底させるようにしました。村上さんを通すようにと」

「いや、デザイン部が悪い訳じゃない。専務に言われりゃ仕方ないさ」

「ところで、村上さん、最近社長に会っています？」

「いや」

「時には会って、話してみてくださいよ。前はこんな経営する人じゃなかったでしょ。元さん亡くなってから、社長もやる気を無くしちゃったみたいに、最近ではあの専務に任せっきりだし、会社でも見かけないですよ」

「あの頃はよかったよな。元さんもいて社長も元気だったし」

「元さん亡くなってから、もう十二年になるんですね。大野印刷が一番元気だったのは、俺が入社した二十五、六年前じゃなかったかと思うんですよ。まだ活版部門があつて、組版が電算化して、社長が座長で社内組版プロジェクトという勉強会もありましたよ」

「そうだよな、いろんなことがあつた……。岡部には、そろそろ言っておいた方がいいと思うので、いまはここだけの話で聞いておいてほしいが、来年三月で会社を辞めようと思う」

「えっ。まだ定年まで七年もあるんじゃないですか」

「おまえだから愚痴を言っても許してくれるだろうが、正直、疲れた」

村上は五年前に離婚している。二人の娘は母親に引き取られたが、長女は昨年結婚し、次女は今春大学を卒業して中堅の商社に勤めている。

「最近、印刷に関する興味もなくなってきたのが分かるんだ。正直、自分でも驚いているんだが」

「そうですか。でも分かります。本当におかしくなつて来ています。理念が無いというのか、すべてがイージーというのか、この仕事を終えたぞという実感が持てませんよね」

「そうなんだ。前はこんなことはなかった」

「それで、どうするんです？ 後は」

「今は何も決めていない。何をするかを考える時間も欲しいんだ」

村上とは大野印刷へ入社以来さまざまな仕事をしてきた。社内でもっとも信頼できる人物であるし、ある種、兄貴的な頼れる人物でもある。

「岡部は、正久君とは会話はあるのか？ 仕事は慣れたみたいか？ 社会人となって四カ月だよな」

「忙しいと、ときにブツクサ言っていますが、仕事は好きみたいです。ただ、販売営業ですので、ノルマは厳しいようです。新人は退職した方の顧客を何人かまかされるようですが、新規のお客さんも作らないといけませんので」

「どの業界も大変だな」

「ええ、なんだか社会全体がノルマやら売り上げアップやらで、日々疲労が増しているよな気がしますね」

「ああ、昔も忙しさという面では変わらないが、今は昔のような仕事のケジメやら気持ちの切り替えができないまま気がつくとか次の仕事に入っていて、疲ればかりが溜まっている感じだよな」

「昔は打ち上げ、などというものも一冊完成したらやっていましたよね。それが次へのはげみにもなっていました」

「いまじゃ出版社にも、そんな余裕はないだろう。昔は予算がなければポケットマネーでも打ち上げはやるというような気概のある編集長も多かったが」

出版社の社員編集者も給料は減らされ、作業量は二倍になっているという話を聞く。この人、十年前はこんな仕事の仕方していたっけと思うような、投げやりな仕事をするような状況にもなってしまう。大手で出世した編集者は、「いかに外注費を削減できたか」で出世しているといっても過言ではない。組織が大きくなれば、肩書きは編集長であっても「管理する」ことや「採算を上げる」ことが仕事の中心となる。組織の上からも「売れる企画を考えろ」や「採算を上げる」との号令が毎月のように降りてくるようである。

（この季節はまだまだ自然が生き生きしているよな。象徴的には春が生命の息吹を感じる季節ってことにはなっているが、四月など花は多いけど、まだまだ冬の枯れ葉がここそこに残っていて、確かに新芽の季節ではあるけど弱々しさを感じるな。自然の力強さは、こんな燃えるような緑の葉っぱがある夏が一番だよ。人間に日陰の安らぎをくれるために青々と茂っているんじゃないかとも思えるな。

右の手前の竹林も、四カ月前には筍だったと思える何本もの青い竹が、周りの先輩に負けまいと上へ上へと伸び盛っている。竹って成長が速いよな。先輩たちと地中で繋がっているから色んなこと教えてもらったりできるんだろうな。

あれ？ 竹林の中。何だろう、ここからじゃよく見えないが。何かあるぞ。何だ。わっ！ 今の変な感覚は何なんだ？ 竹林の中は権茸を作っているんだ。それは分かったが、急に目の前にクヌギの丸太が並んだ。驚いた。昨年、連休で好美を連れて実家に帰ったとき権茸採ったよな。好美は大学生なのに、おばあちゃん、おばあちゃんと、子どものようににはしゃいでいた。好美には立て掛けられた丸太から、権茸がニョキニョキと生えているところを見るのはじめてだし、それを自分で採ることが嬉しかったんだな。次は秋にならないと権茸は採れないんだと、おふくろも言っていた。それにしても、今の感覚は何なんだ？

「由川。荒井出版の『限界を超えて』は明日再校出のだが大丈夫か？」

「大丈夫です。田中にも手伝ってもらっていますので今日中には出力できそうです。あれ、奥付の原稿が来てないや。昨日、送るって連絡もらっていたんですが」

「連絡とって送ってもらえ。再校では全体をまとめたいからな。鈴木さん。爆風堂の書籍も明日初校出しの予定になっているけど大丈夫かな？」

「すみません。大井書房の再校出しが思ったより時間がかかって、爆風堂いま続きをはじめたので、まだ三章です。あと五章残っていますので、やってみないと分かりません」

「分かった。ちよつとギルドへ行ってくるので、帰ったら手伝おう。でも慌てるとうるなことはないので爆風堂には明日の夕方になると連絡しといてくれるかな。それ結構時間かかるだろ」

「ええ。写真の挿入も各章十点ばかりありますし、図版が……」  
「だよな。ギルドから戻ったらちよつと打ち合わせしよう」

ギルドというのは、社員五人の外注のデザイン事務所で、社長の武山は美大の同窓生である。打ち合わせの書類をシヨルダーバッグに入れ、部屋を出る。廊下を隔てた向かいの広告デザイン部では、また田上が上島部長から怒られている。入社して三年になるが、一週間に一度は部長から怒鳴られているようである。人には向き不向きがあり、田上は広告向きではない。いやチラシ向きではないと言った方が正確であろう。ところが文字組をさせると、うちの由川以上の力量を発揮できる。残念ながら広告デザイン部に文字組で見せるといような仕事はあまりに少ない。

一階に下り正面玄関から外に出る。梅雨明け後のキラリとした日射しとともにジージーギギと蝉の鳴き声に襲われる。注意して聞き分けるとミーンミーンであったりシャー

シャワーであったりツクツクツクであったりとそれぞれに個性がある。だが「今年も暑いな」と意識を外してしまうと、グワングワン、ガシャガシャとばかりに何十何百の蟬の轟音となる。こいつら騒音防止条例違反で訴えてやろうかとも思う。この時期、会社の横の公園の木の幹や枝に、蟬の抜け殻がいくつも掴みとどまっている。どうせ地上では七日ばかりの命か。などと考えると、今度は愛おしさがわいてきて、こいつらも頑張っているんだとエールさえも送りたいくなる。勝手なものである。

会社から私鉄の駅までの十分ばかりの道沿いも、ここ二十年で随分と景色が変わってしまった。以前はポツリポツリと農家が点在して、田んぼや畑がほとんどだった会社の近辺も、今は住宅地として開発され川は暗渠となり道路となる。十年ばかり前までは、まだ残っていた畑も、気がつく和二、三十軒は入っているマンションが建てられ毎年消えてゆく。かつてあったアーケード街も往時のにぎわいどころか、三軒に一軒はシャッターを下ろしている始末。人口は増えているはずなのに。駅前開発、そして隣町にできた大規模ショッピングモールの出店で、昔からあった小さな商店には客が来なくなる。各家には車があり、より大きい店に、より新しい店にと便利を求めて客は集まる。そして年寄りだけが残されて、買い物でも医者でも不便な中で生活をする。

あくせくと働きながらも、どこかで「こんな社会を作るために頑張っているんじゃない」と、「違うんだよな」と考える自分もいる。ズボンのポケットからハンカチを出し汗を拭う。ここ五年、下腹部の張りが女房にも指摘される。それとともに汗かきになった自分に呆れている。しつかりと中年である。

JRのターミナル駅で乗り換え、二駅目で降りる。この駅からも地下鉄と東京の西へと延びる私鉄線が出ている。駅前の「ノンベイ横町」と名前がついた飲み屋街を通り抜けた先にあるマンションの二階に「デザインビルド」はある。他にも会社は入っているが、一般の家族用のマンションである。

呼び鈴を鳴らすと「ちよつとお待ちください」と田中美織の声。しばらくしてガチャリとドアが開き美織の顔が覗く。「どうぞ」、「どうも。今日は」と言いながら目を見ながらうなづく。「社長。岡部さんがみえました」といいながら、玄関の側の部屋をノックする美織。一応、ここが社長室である。「どうぞ」の声で、ドアを開け入る。

「ああ、もうこんな時間か」と自慢の髭を撫でながら時計を見る武山。

「アポは三時半だったよな。どうした浮かない顔をしているじゃないか」

「うん、ちよつとな。青木が辞めると言っているんで、求人を出そうか出すまいかと悩ん

でいたんだ」

「青木君が。一昨年結婚したんだよな。もう四十近かったよな。なんでまた」

「三カ月前には赤ん坊も生まれたんだ。実家の親父さんが倒れたんで帰るそうさ。山梨のブドウ農家で、青木は長男なので家業を継ぐんだそうさ」

「へえ、知らなかったな。ブドウ農家か。農業も大変だとはいうが、こんな東京なんかでアクセクするよりも、山梨でブドウ作っていた方がいいって」

「俺もそう思うよ。祝福して送り出してやりたい。ただうちとしては痛手なんだ。二十年近く仕事をしてきているんで、彼の代わりは簡単には見つかりそうにないな。チーフでもあるし」

「崎山君や木村さんも力をつけてきているんじゃないか。世代交代の時期かもしれないな。新陳代謝するつもりで考えないと、青木君も困るんじゃないか」

「そうだな。求人出してみるか。今日は何だったっけ。進啓出版のムックのフォーマットの打ち合わせだったっけ？」

田中美織が麦茶を運んでくる。

「美織もイラストだけじゃなく、デザインもできれば事務所としても助かるんだがな」

「すみません。でも私、女だからどのみち結婚して辞めちゃいますよ」

「これだ。木村みたいにバリバリやるんだ、いずれは独立するんだという気概が持てないものかな」

「キ・ガ・イですか。子どもを育てるという気概はありますよ。残業、残業で木村さんも月に五日は泊まっていますよ。そんな状況を続けようとは思いませんよ。普通に結婚して、旦那も普通に六時に帰って来て子どもと遊んでくれる。そんな生活が夢なんです」

「はあ。いいや。木村呼んできて。ムックの打ち合わせだ」

田中美織は二十四歳のイラストレーターで、ギルドでは最年少の入社二年目である。電話や玄関の応対、お茶汲みは新人の仕事となつていようである。彼女の言う「普通の結婚生活」は、私自身してこなかった。十年前まで、こんな話を聞くと、「この業界を甘く見るんじゃない」と若者に対して怒っていたものだ。いまはむしろ「その『普通の生活』が正しい」、どこかで変えなきゃなとも思う自分もいるのだが、でもどうにもならないしな、と半分は諦めてもいる。

ギルドとの打ち合わせが終わり、大野印刷に帰ったときは五時を過ぎていた。デザイン部は他の部署とは違い十時から六時が定時ではあるが、定時で帰れるときは月に数日しか

ない。むしろ終電に間に合うように、こここのところの目標となってしまっている。今日もすでに十一時を経過している。由川と田中も九時過ぎになってしまったが、すでに退社している。

「鈴木さん。もうこんな時間なので、今日は終わりにしなさい。明日でも大丈夫だろう」

「岡部さんは帰らないんですか」

「七章があと一、二時間で終わりそうなので、終わらせるよ。荒井出版の再校ゲラもざつと見ておきたいしね。夜食を買いがてら駅まで送って行こう」

鈴木さんの準備を待ち、二人で廊下に出ると、向かいの部屋では今日も一人で田上が作業をしている。怒られてもめげないところが田上のいいところではある。田上のアパートは確か二駅先だが自転車通勤しているようで、一週間に三、四日は深夜十二時以降の退社なのである。

「田上さん大丈夫ですか。昼間、また上島部長に絞られていたみたいなんですが」

「ああ、彼は広告が向かないんじゃないのかな。組版きっちりできるので、もったいないんだが。うちに引き取る訳にもいかないんだよ」

専務の前野からは、出版デザイン部の利益率の低さを指摘されていて、これ以上人は増やせそうにない。

外へのドアを開けると、さすがにこの時間は昼間の熱気も冷め、涼しさを感じる。

「なんだかエアコン入れている室内より、外の方が涼しく感じるな。風があるせいかな」

「そうですね。気持ちいいですね。よく見ると星も結構見えるんですよ。岡部さん知っていました？」

「ああ、本当だね。最近、夜空を見上げるなんてこともしなくなったな。でも、以前はもっとたくさん星が見えていたよ」

「そうですね。私が入社した十年前は、まだこのあたりは農家しかなかったので、夜はけっこう暗かったんですよ。でもそのころは逆に私は下しか見ていなかったんですが。彼と会って私自身、変わったように思うんです」

「すまんね。まだ新婚だというのに、こんな時間まで」

「いえ、いいんです。仕事は好きですし、彼も帰ってくるのは終電近くですから」

昨年暮れに結婚したばかりで正式には森上桂子、三十二歳であるが、本人の要望で会社では旧姓で通している。鈴木さんは、確かに入社したころは、どこか取っ付きにくさがあった。暗いという訳でもなかったのだが、全身から「仕事以外のことは話しかけないで

ください」のオーラがにじみ出ていた。そのころのなごりが、いまだに「鈴木さん」という認識なのである。広告デザイン部にいる吉井紀子も鈴木さんと同い年だが、こちらは「吉井紀子」として認識している。鈴木さんは鈴木桂子ではなく、やはり「鈴木さん」という認識なのである。

それにしても、つきあう男性によって女性がここまで変わるケースを他には知らない。それに関しては本人も驚いているとは、以前言っていたが、入社当時は今ののように会話ができるような女性とは想像もできなかった。本当に快活になったものである。夫の森上は大学の准教授で生物学の研究者である。鈴木さんとはちょうど十歳離れて四十二歳である。平日の夜は遅くまで研究室にこもっているが、午前中の講義のない日や土日を利用して、マンションの近くに農家から土地を借り、二畝ばかり無農薬で野菜を作っている。おかげで出版デザイン部の岡部を含めた三人とも野菜だけは不自由はしていない。昨日もトマトとキュウリ、そしてピーマンを貰ったばかりである。

森上には鈴木さんの結婚の前後、数回会ったが、「日本人は生活の基盤に『農』を置くべきなんです」という彼の口調はおだやかで他人を引き込む何かがある。鈴木さんが「変わった」ことも理解できる。鈴木さんよりも四十八歳の私の方が、世代としても近い。どこかで時間を見つけて話してみたい人物の一人である。

「人には向き不向きはあるんですが、彼といると安心できます。最近私も出版社前に畑を手伝っているんですよ。人間だって動物なんだから、最後には土に帰るんだっていうのが、野菜を作っていると理解できるような気になってくるんですよ」

「そうなんだ。彼は専門分野じゃないからというけど、生態系も含めた広い意味での経済学のことを以前聞いたよ。いまの狭い経済学じゃ、あまりにも危険だってね。また話を聞きたいな。地球全体の環境破壊の問題は大きすぎるけど、毎日ある列車の人身事故なんかは、やはり人間が生物であることを無視した生活環境が原因だと思えるようになってきたよ」

「年間三万人以上の自殺者が十四年続くなんて、先進国では異常な数字なんですよね。もつとのんびりした生き方をしたいわ」

「そうだね。大野印刷をみていても、かなり無理をしているようにしかみえないよ。上島部長だって、以前はあんな怒り方をする人じゃなかった。いや日本の社会全体が無理に無理を重ねて頑張ってきたんだと思うよ。改めて考えると『頑張る』という言葉もなんだか罪作りの言葉だよ」

「岡部さんも、このところ頑張り過ぎじゃないんですか。会社の泊まり、多くなっているんですか。無理をなさらずに」

「ありがとうございます。でも、まだ娘の学費も残っているんでね」

駅で鈴木さんと別れ、その先のコンビニでオニギリと缶コーヒーを二人分購入する。会社に戻り、広告デザイン部のドアを開ける。

「あ、岡部部長。どうしました」

「頑張っているな田上。差し入れた」

（意識を飛ばすというのか、そのものに集中すると、その場所に意識を移動できるところが分かってきた。竹林の中へ意識が飛んでしまったときは驚いたが、少しずつ自分でコントロールできるようになってきている。さっきは左の尾根にある一本杉を真上から眺めることができた。鳥のように自由に意識を飛ばすことができれば楽しいのだろうか、一本杉の上から突然この場所にガクンと意識が戻るものだから、目眩に似た気分が襲われる。まあ今日はこのへんで眠ってしまおう）

事務所からの帰り、私鉄の駅を降りて歩く。時刻は十時をまわっている。以前遊びに来た高校の同窓生の雅美に「二十分歩くんなんて遠すぎない。私の友だちで、駅からこんな遠くに住んでいる人はじめて」と言われた。雅美自身、高校時代には自転車で三十分かけて通学していた。雪の日などは一時間半を歩くこともあったが、当時は愚痴の一つも聞いたことはなかった。瀬戸内の田舎町での通学は、誰もそれを普通に行っていた。便利に慣らされると人はこんなにも変わるものかと思った。

以前は駅まで自転車を使っていたけど、半年の内に二台続けて盗まれてしまうと、「神様はわたしに〈歩け〉と言っている」とばかりに開き直るしかなかった。いまでは歩くことを楽しむことができる。

それにしても最近の事務所の仕事は、明るいうちに帰れたためしがない。二週間前、チーフの青木さんが退職したのもあるけど、代わりに田上さんという新人が、といっても私より五歳上の二十九歳だけど、入社している。物理的に仕事量が多くなっているんだと思う。私自身のイラストの仕事は、そんなにはないのだが簡単な文字直し程度ならDTPソフトも使えるようになったので手伝う。結局今日もこの時間である。

仕事に対するスタンスは、人それぞれいいと思う。私には木村さんのように仕事に入

れ込むことはできないと思う。「普通の」女性で充分である。普通に結婚して普通に子どもを育てる。「結婚したら仕事は辞める。そして子ども二人を自分の側で育てる」。これは高校時代から自分に言い聞かせている。

ただ、まわりを見るに、子ども二人と奥さんを養うだけの給料を得ている男性がどれだけいるかが、気になって仕方がない。同じ美大の先輩をみても専業主婦は皆無である。最初は奥さん自身が働くことが好きな方が多いんだとばかり思っていた。ところが話を聞いてみると旦那さんだけの給料では、子ども一人と妻を養うことができないという。「そのために私も働いているのよ。ましてや子ども二人なんて夢でしよう」と同窓会で知り合った五歳上の先輩は言う。どうやら時代が私の思うようにはなっていないらしい。そんなことを考えるようになったのも、ここ数カ月である。それでも「男性と同じようにバリバリと働く」は、私には向かないようである。

駅から二十分も歩く間には、このようなことも考えることができる。それと自転車では気づかないさまざまなことも見えてくる。今のような夜ならたとえば影である。

街灯の真下から一メートルも離れると、足下にクッキリとした自分の影ができる。街灯を背にしているので当然ではあるが、その影が次第に前に向かって伸びてゆく。歩く先は長く長く伸びてゆくが、次第に頭から消えはじめる。そして次の街灯の近くで完全に消え、また街灯の先からはつきりと姿を現し伸びてゆく。足元から現れ、歩くのに合わせて伸びてゆき、頭から消えてゆき、また現れる。楽しいデートである。影法師との夜の散歩である。

ところが街灯が規則正しくはないのか、あるいは節電のため間引かれているのか。きちんと影を作るには光量不足となった時に、右斜め前に足元から四十センチメートルばかりの影があるのに気づく。最初は道の反対側に高い街灯でもあるのだろうと、そのまま歩き、次の街灯で足元からの影が伸びまた消える。そのとき右斜め前の影が、薄くはあってもそのままの形であることに気づく。背筋に冷たいものを感じる。恐る恐る立ち止まり左後方の影と反対の空を見上げる。地上の光を反射して夜でも少し明るく見える雲の合間に、白い丸い月が見える。

満月の明かりは、街灯のある場所でもよく見ると充分な影を作るだけの強さがあることを知ったのは、半年ばかり前のことである。新鮮な発見で、二人の影法師と散歩を楽しむことができるようになった。

住んでいるのは四階建てのオートロックのマンションで、三年前に両親が出て来たとき

に「東京は物騒だから」ということで強引に転居させられた。当時のアルバイト料ではとても無理なので、卒業までは部屋代の半額は両親が負担するとも言ってくれた。2DKという広さも含め分不相応とは思いながらも転居した。三階のエレベーターを出て左の端で、東と南に窓があり、朝は明るい陽が入り込む。住んで何よりも気に入っているのは、晴れた日は南の窓から西の方に富士山が見えることである。

JRのターミナル駅から私鉄の電車で三十分、駅から歩いて二十分。事務所まで一時間みておけば大丈夫である。玄関を入って右側にある郵便受け、「305号田中美織」のボックスから手紙を取り、反対側のキーパネルに鍵を差し込み内側のドアを開けエレベーターに乗る。自宅のドアを開け電気をつけ、昼間の熱気の残る部屋の空気を入れ替えるため窓を開け放つ。

手紙は実家の母からで、昨年結婚した幼なじみの早紀に子どもが生まれたことが書かれていた。三千グラムの女の子だそうである。母にとっての今の一番の関心事は、長女の私の結婚であることは容易に想像ができる。私自身も、できることなら早く結婚したいし、子どもも育てたい。先日読んだ生物学者の本では、人類の理想的な出産年齢は十七歳から二十三歳くらいであると書かれていて、すでにその歳を過ぎてしまった自分に「まあ、仕方ないよね。相手のあることだし」と自分を慰めてみる。今付き合っている彼とは訳あって結婚はできないのだから、まだまだしばらくは母の期待には応えられそうにはない。

窓を閉めエアコンとテレビをつける。風呂の湯船にお湯をはる準備をする。冷蔵庫から牛乳を取り出しグラスに注ぐ。ニュース番組を見ながら牛乳を飲む。飲むはしから汗と natte 流れるようである。ともかく暑い。南では台風が発生したという。

脱衣場で脱いだ下着やシャツを洗濯機に放り込み、化粧を落とす。まだお湯が途中の湯船に膝を抱えて座る。腰の方からお湯が増えてくる。増えるにつれ体からも汗が流れる。膝頭までお湯がきたところで手を伸ばしてお湯を止める。膝を抱え直して、そのまましばらく動かない。こめかみや額から汗が流れ落ちる。洗い場に出て体を洗う。シャンプーをする。リンスを使う。また湯船につかり膝を抱える。真夏でもシャワーだけではなく湯船につかるのが好きである。

風呂から出て、バスタオルで髪を拭きながら、もう一度牛乳を飲む。部屋はエアコンで適度ではあるが、それでも牛乳を飲んでいいる間は汗は絶え間なく流れる。テーブルに置いた携帯が振動する。彼から「これから行ってもいいか」とメールが入る。「いいよ」と返信する。彼との付き合いも一年が経とうとしている。仕事関連の方たちを呼んだ事務所主

催の納涼会の帰りに、誘ったのは私で、最初は彼も恐る恐るという感じだった。誘った自分にも驚いている。ホテルでシャワーを浴びる彼を待ちながら「私ってこんな人だっけ？」と考えずにはいられなかった。その日だけのつもりだった。彼の優しさもあるけれど、セックスに相性というものがあることをその日、知ってしまった。

彼に言わせれば私がセックスに関して「幼かっただけ」だそうだが、学生時代に付き合っていた彼氏とのセックスでは味わったことのない世界に、今は入り込める。「恍惚」という言葉が私には理解できないのだけれど、自分の皮膚の内と外がぐるりと入れ替わり、白い無意識の世界の中に自分が落ちてゆく。最初は戻って来れないんじゃないかと白い世界の扉の前で強引に足を突っ張り、「怖い。怖い」を連発していたそうである。そう、きつとそうだよ。あれは白い世界の扉の前だったんだ。今は、ときにはゆっくりと、ときには性急にその白い世界に自分から意識を落とし込むことができる。

今年、ちょうど私の倍の歳だという彼は、週数回のこんな夜だけの関係なんだけど、すでに私の中では日常というのにふさわしい存在になっている。

(この場所で目覚めるようになってどのくらい経ったのかな。毎日が清々しくて新しい発見ばかりだ。その先の小さく流れていた水は、その少し先で少し大きな水の流れになっていた。その水の中に小さなヤゴというのかな、虫たちがいる。トンボの幼虫なのかな。そのまた二十メートルばかり先では、もっと大きな流れになって、二センチばかりの魚もいる。

雑木林の中の木。その黄緑の葉っぱの葉脈の中の細胞の中にまで意識が飛ばせることも発見できた。言葉での説明は難しいが、ここから見える自然は、それぞれが関係を持ちながら存在しているのが感じられる。動物も植物も、その個々の意識の中で、お互いが身を寄せ語り合い、養分を分け合い、情報を伝え合い生きているのが感じられる。ものによっては数日で成長し衰え死んで行くものもある。「死」という認識は正確ではない。枯れて小さな生物の餌になり、土になる。その土にまた新しい植物や動物が生まれる。不要なものは何一つとしてないのだ)

出版デザイン部で由川と打ち合わせをしていると、ドアを押し開け広告デザイン部の部長の上島が入ってきた。

「岡部。ちよつと時間作れるか？」

「いいですよ。何か？」

「ちょっと外に出ないか」

階下に降り、外に出て自動販売機でコーヒーを買い、喫煙コーナーへ行く。八メートルはあるだろうか、会社の庭先にあるイブキの木の下に灰皿が二つとベンチが設置されている。ベンチに座り、上島がポケットからタバコを出し使い捨てのライターで火をつける。私は缶コーヒーのプルトップを引き、コーヒーを飲む。最近ミルク入りの甘いはずのコーヒーが、やたらに苦く感じる。

「岡部はタバコをやめてどのくらい経つんだっけな」

「もう三年になります」

「以前言ってたよな、飯が旨くなったって」

「ええ、もともと好き嫌いじゃなかったんですが、すべての食べ物が美味しくなりました。量も増えましたので、体重も増えますが。でもこのところ調子がおかしいんですよ。味覚障害かもしれません。このコーヒーが苦いんですよ」

「よくないな。少しは休めよ。ここのところ泊まりが多いんだろ」

上島部長は五十二歳だったと思う。私より四つ歳上である。岡部の入社当時はデザイン部は一つしかなく、村上とともに上島は頼りがいのある先輩だった。十五年ばかり前に出版と広告の二つの部に分かれたときから、上島は広告、岡部は出版を担当している。

「岡部には礼を言っておかきやと思つてな」

「えっ、何のことでしょうか？」

「田上のことだよ」

変な誤解をされるのを避けるために、田上をギルドに紹介したことは上島には話していない。田上にも言わないようにと釘を刺しておいたのだが、どこから漏れたのかと考えながら気持ちを手構える。

「先日、田上から連絡があつてな。岡部の紹介でデザイン事務所に仕事が決まったと言つて来たよ。元気にやっていると」

「すみません。社長が大学の同窓でスタッフが辞めて困っているようでしたので。うちの外注先なんです」

「いや、こちらも助かったよ。田上に『向かないんじゃないか』と言ってくれたんだつてな。俺にはそれが言えなかった。文字組の技術はあれだけあるんだが、うちはチラシがメインだろ、確かに向かないんだよ田上は。あのままいたら毎日ガミガミとやらなきやなら

ない。田上だけじゃなくて俺自身もまいつていたところなんだ」

「田上も可哀想だとは思いましたが、上島さんを見てるのが辛かったんですよ。田上のことを一番解っていたのは上島さんでしたから」

「ありがたいな。田上は優秀なんだよ。場所さえ間違わなきゃ充分に戦力になる人材さ。その分勿体なくてな。顔を見ると言いたくなるんだ。相手がチラシじゃ、あいつの能力を發揮できる環境じゃないと解つていてもな。気がつくとかミガミとやってるんだ。このままやっていたら、どちらかがノイローゼになるんじゃないのかと、気持ちの端っこで思つてもいたんだが、止まらん」

上島に限らず、「自分をどこまで自分のままで維持できるのか」が今を生きる我々の課題だと言っても過言ではない。油断すると糸が切れてしまい自分を見失ってしまうか、壊れてしまうかである。壊れてしまうと、きっと自分は見えなくなるんだろう。

先日、郷土史を作りたいというので打ち合わせに行った役所でも、直接の担当だと紹介された人物が壊れていた。自分がどのようなものを作りたいかではなくて、同席した課長にどのように気に入ってもらうかが、企画内容の基本のような打ち合わせとなり困っていた。その担当にコピーを取りに行かせた課長は「すみませんね。彼はちよつと心を病んでいまして、僕の方で細部までチェックしますので、一応彼を窓口ということにしておいてください」と言う。これまでもさまざまな形で混乱を起こしているようであった。

壊れてしまう。それを防ぐために上島は部下にあたり、村上は自分の立つ場所を変えてみようとしているのか。

（左の雑木林の先の尾根の上の方から、黄色や赤の絨毯が昨日十メートル、今日二十メートルと降りて来て、近くの雑木林の中にまで秋の気配がまばらに表現されはじめる。毎日通った会社の側の公園にある桜の木は、毎年初冬には急激に赤と黄の葉になつたかと思うと、翌朝にはサラサラと歩道に舞い降り、カサコソと足の底で音を出し、ついついサーと蹴飛ばしてしまう願望を湧かせる。その桜の葉が温暖化のせいかは知らないが、ここ数年初秋の時点で緑のまま枝から手を離してしまい、不恰好にもまばらになつた枝をさらしていた。

そういえば、なぜ私はここにいます。ここは何処なんだろう。

あの日から、そうあの日、私は駅で電車を待っていた)

あの朝かかってきた電話は、主人の勤める会社でお世話になっている村上さんから電話だった。息子の就職祝いのお礼もあったが、その後の電話の内容が身に覚えのない、よその家庭の話なのかと、村上さんが他の社員の方と間違って電話をされているのではないかと、そのときは思った。

「岡部君、体調は大丈夫でしょうか？ 昨日はめずらしく休みを取ったようですが」

えっ。主人は昨日は普通に出社している。はずなのだが。いや、出社した。家は出た。体調を崩して家で寝ている？ 昨日は出社して会社に泊まっているはずなのだが。仕事が忙しくて泊まっている。はず。混乱する頭の中を整理するのときが必要だった。

「主人は、昨日は会社に泊まってはいいんですか？」の言葉を出すのがやっとだった。そう。あの日は土曜日だった。村上さんとのやり取りで、主人は前日の朝、「調子がよくないので今日は休ませて欲しい」と会社に電話して欠勤しているそうである。村上さんはその日、土曜日ではあるが主人と打ち合わせの予定を入れていた。しかし体調が良くないようなら打ち合わせは月曜にしようかと電話をくれたのだ。

状況の異常さに気づいた村上さんは、会社の近くの警察署に問い合わせた。五十歳前後の男性の交通事故や身元不明の遺体は無いという。携帯にも電話するが繋がらない。自宅は普通に出ていた。その前日の朝の様子を思い出してみた。何も変わらなかった。普通のバタバタとした朝だった。はずなのだが。パートを休むと電話して、会社と自宅以外に主人が行きそうな場所を考えてみた。何一つとして頭には浮かんではこない。自宅と会社、それ以外に主人の居場所は想像できないのだ。村上さんもいくつか仕事関係の場所をあたってくれたのだが、どこにもいないという。午後、休みを取った正久と一緒に近くの警察署に相談に行った。

「事故でなければ失踪ですね。一応捜索願い出しますか」と主人と同年輩の警察官が言う。日本では毎年八万人以上の失踪者がいるのだという。「行方不明」、「蒸発」という表現もあることを知る。一日半行方が分からないのである。捜索願いを出す。警察署横の公園でしばらく休む。ザーザーと蝉の声がうるさいが、頭の中は小さな黒い点が少し大きくなったり、また小さくなったりと具体的に何かを考えることができなかつた。横に座った正久の横顔は日増しに主人に似てくるのだが、いま地面の一点を見つめているその目は、やはり自分にも似ていると思う。

自宅に戻り、主人の実家にも電話してみた。兄嫁が出て、帰ってはいないと言う。状況を説明し捜索願いも出していることを伝えた。受話器を置く。側に座る好美と目が合う。

「今晚の夕食、何にしようかね。買い物に行かなきゃね」

「お母さん。こんなときに……」

主人の消息が不明であることを、ただただ忘れたかった。

あれから、もう三カ月が過ぎようとしている。私は毎日同じようにスーパーのレジのパートである。息子も普通に出勤しているし、娘も学校に通う。思い出したように主人の携帯に電話してみるが、当然のように繋がらない。

（あの日。駅のホームで電車を待っていると、ギユウギユウと人を詰め込んだ通過列車が上りホームを通り過ぎた。「次の各駅停車も混んでるだろうな」などと考えながら、何となく首を、通過した列車を追うように東に向けてみた。そこにちょうど右前方から下りの列車が入って来た。「空いてるじゃないか」と。

下り電車の座席に座っている自分に気がついたときは、三つ目の駅のドアが閉まるところだった。「おっ。まあいいか。たまにはこんなこともあるさ」と、ひとりごとを言う。四つ目の駅、五つ目の駅が過ぎて腰に根がはったように立とうとはしない自分がいた。立ち上がることができたのは「終点です」のアナウンスを聞いてからだ。「今日は休む」と会社に電話した。

あの日はまだ夏の盛りだった)

「大野印刷の村上と言います。武山さんいらっしゃいますでしょうか」

電話を社長にとりつぐ。声にズンと頭の中に指を差し込んだような、何か潜んでいるのが感じられた。ドクンと心臓が打つ。

グラフィックギルドの制作室は、八畳と六畳のダイニングを繋げた細長い部屋に五人のスタッフがそれぞれ壁に机を向けて作業をしている。土曜日ではあるが今日は珍しく四人が出社している。

電話を終えた社長がのそりと制作室に入ってくる。

「田上は個人的には岡部とは連絡は取っていないのか？」

「ええ、会社では別の部でしたので個人的な付き合いはありませんが。先ほどの電話は営業の村上さんからですよ。珍しいですね。岡部さん、どうかしたんですか」

「昨日から連絡が取れないようなんだ。さつき俺も岡部の携帯に電話したんだが繋がらない。木村は進啓出版のムックの作業で岡部と連絡は取っているか？」

水曜日の夜には私の部屋にいた。ドクンドクンと心臓の音。

「火曜日にフォーマットを入れましたので、そのとき電話で話したのが最後です。次は進啓出版からの連絡待ちということでした。普通だったと思いますよ」

水曜日の夜には私の部屋にいた。いや木曜日の朝までは私の部屋にいたのだ。社長の話だと金曜日の朝、本人から会社に「調子がよくないので今日は休ませて欲しい」と連絡があったそうである。ところが自宅からは普通に出勤している、いや出かけているという。

トイレに行く。社長やみんなが、あれやこれやと話している中で不自然かとも便器に腰を下ろして思っている自分もいることが不思議だった。それでもドクンドクンと心臓の音。これ私の心の音。彼の携帯に電話する。ププ、ププ、ププと呼び出し音が鳴る。出ない。こんな昼間に、ましてや私の方から電話することなどなかった。もう一度電話する。やはり出ない。トイレから出る。少しふらついていたのか、木村さんから「大丈夫？ ちよつと顔色悪いんじゃない」と声をかけられる。「大丈夫です」と自分の席に着く私に「美織も岡部にかわいがられていたからな」と社長が言う。ドクン、ドクンと心の音が鳴り響き、左の耳がツンと聞こえなくなる。「みんな、何か思い出したりしたことがあつたら俺に言ってくれ」と言つて社長は部屋を出て行った。

あの日は、まだ暑い盛りだった。帰りの電車の中や駅を出て歩きながら、メールや電話をした。繋がらない苛立ちを記憶している。その後は化粧も落とさないまま裸で湯船に膝を抱えて座る自分がいた。お湯も出さないままであった。額を伝った汗が目に入ることので、我に帰ったことを記憶している。

「美織、そのカップを取ってくれ」

田上と暮らしはじめて一カ月が経とうとしている。来年秋には結婚も予定している。

二カ月ばかり前、母に「付合っている人がいる」と電話したら、二日後には上京して来た。母は田上に会い、気に入ったようで、あれよあれよという間に来年式を挙げることとなり、部屋代が勿体ないからと「一緒に暮らせば貯金も貯まるでしょ」と田上さえも驚く仕切り魔を披露した。

彼が、岡部さんが、失踪して三カ月半が経とうとしている。彼が好きだった南の窓からの遠くの青々とした景色も、モミジの紅葉から街路樹のイチョウの黄葉へと色を変えている。そういうえば彼が最後に見た富士山は、雪などはかぶつてはいなかったんだと思うと、本当のときが経ったんだと思う。いまだに行方不明のままではあるけど、美織には彼は二度と帰っては来ないんだと実感できる。

失踪して一カ月後だったかと思う。ちょうど田上から誘われて、ちゃんと付合おうかどうかと悩んでいたころ。いつものように駅から自宅への影法師との散歩をしていると、そう、澄み切った満月だった。「美織。いいんだよ、もう。しあわせになりな。元気で」と岡部さんの声が聞こえた。はつきりと聞こえた。

その日部屋に戻り、ここには彼の気配が何一つ無いことに気がつく。そういえば彼は歯ブラシ一つさえこの部屋に置こうとはしなかったことを思い出し、涙が止まらなかったのを覚えている。

(やはり、ここはいいよな。もう冬だが、空気もキンと張って本当に気持ちがいい。この頭のスキリさは何なんだ。色んなものが見えてくるし、色んなことが理解できる。ここから見える景色も飽きないんだ。今日のような晴れた日は、少しこわばった常緑樹の細胞のひとつ一つが小さく動いている。雨の日の、少しばかり柔らかな細胞も、やはり「生きているんだ」と感じられる。雪が降ったら、もっと違う動きをするんだろうな。さまざまな場所に意識を送り込むことができるようになると、すべてに優しくなれるんだ。不思議な気持ちなんだよな)

「このあたりだよな確か」

「おーい。あと十メートルばかり先だ」

「お、あったあった。こんな所じゃ真上からは見えないよな」

「雪が降る前でよかったよな。雪の後じゃ来年の三月過ぎないと見つからなかった」

「早く写真を撮って、上げてやろう。おっ、へんな仏さんだな。こんな場所で背広にシヨルダーバッグを背負ってるぞ。まるでサラリーマンじゃないか」

「あそこから落ちたんだな。四十メートルはあるか。いま上げてやるからな」

(おい。ちょっと待ってくれ。動かすなよ。私はここがいいんだ)